ファイターズのOB紹介

社会で輝く青き星 10

ファイターズは人生の縮図

総合病院サクラ・ワールド・ホスピタル
長野 祐一

「マスタリー・フォア・サービス」

２０１９年1月からインド南部のベンガルールにあるサクラ・ワールド病院で経営者として勤務しています。当院は２０１４年にインド初となる日本の企業が設立した総合病院です。３００病床を有し、37の診療科目を揃えています。特に脳神経外科、整形外科、消化器内科・外科、循環器内科・外科、リハビリ科においてはインドでトップレベルの質と症例数を誇っています。本稿執筆時点、世界中で猛威を振るっているコロナウィルスの感染疑い／感染患者の受入れについても、いち早くＰＣＲ（ポリメラーゼ連鎖反応）検査の許認可を取得し、専門外来・専門病棟も整備しました。インド人スタッフの使命感にも随分と助けられながら、地域住民の健康と命を守り抜くために考えうる準備を進めました。コロナウィルス対策を院内で進めているとき、私が大学3年生の時に発生した阪神・淡路大震災のときのことを思い出していました。震災直後は春季シーズンはもちろん、秋季シーズンの開催も危ぶまれる状況でしたので、チーム運営をどうすべきか日々戸惑いながら過ごしていました。チーム再開の目処が立たない時期には、避難所でボランティア活動をする部員も多くいました。自宅マンションが半壊して行き場を失った私は同期の自宅や下宿先を転々としながらも、一旦は実家へ戻る必要がありました。この年のキャプテン・山田晋三が掲げたスローガン「勇気」を合言葉に、少しずつ練習も再開され、4月に入るとほぼ例年通りのチーム運営ができるようになっていきました。どんな困難な状況にあっても、自分に与えられた場所で、今その時に出来うることを精一杯やり切る。同時に、仲間と一緒に考え、知恵を出し合い、協力しながら試練を乗り越えていく。当時のそんな日々をインドの現場で思い起していました。

いま医療事業に携わっているのは、２０００年から会社の海外留学制度で社会福祉学修士課程を履修したことに遡ります。社会福祉学を専攻した理由は、会社が掲げる「社業を通じて社会に貢献」していくために、発想の起点として社会福祉思想を一度学ぶ必要があると考えたからでした。もう一つの理由は、中高時代のフットボール部の先輩がヘリコプターの墜落事故で多重の障がい者となってしまったことをきっかけとして、ずっと医療事業に携わりたいと考えていたからでした。

現役時代に阪神・淡路大震災で被災し、留学中には目の前で米国同時多発テロに遭遇してから、「人生一秒先に何が起こるかわからない。一度きりの人生、いつ死んでも後悔しないように、やりたいことは全てやり切って、日々精一杯激しく、楽しく過ごそう！」と心に決めました。以来私の座右の銘は「明日死ぬかのように生きよ。永遠に生きるかのように学べ。」というガンジーの言葉となっていました。その私がガンジーの国インドへ来て、インド人スタッフと共に人の命を守るために働くことになるとは想像もしていませんでしたが、これも何かの巡り合わせであって、これは私の使命なんだと考えるようになりました。

「マスタリー・フォア・サービス～奉仕のための練達～」は、隣人・社会・世界に仕えるため自らを鍛える、という関学のスクールモットーですが、私の現役時代もファイターズではハドルやミーティングの中でよく引用されていました。また、就職した会社では、「社業を通じて社会に貢献する」ことを事業運営の憲法として定めており、「額に汗し、努力の結果以外の利益は受けない」と律しています。そして、様々な巡り合わせの中で、いまインドで病院を経営しているわけですが、病院事業は社会インフラの一つとして患者と地域社会のために、24時間３６５日ひと時も休むことなく医療サービスを提供し続ける事業です。今振り返ってみますと、関学、ファイターズ、就職先、病院事業とすべては根っ子の部分で繋がっているのだろうと思います。

2年生 夏合宿
（後列左端）

4年生 秋季シーズン

これらに共通することは、自分の存在意義は社会に役立つため、つまり社会を今よりも少しでも良くして、人々にいくばくかでも幸せになってもらうためであり、そのために自己研鑽を日々惜しまず続ける、ということではないかと思います。

ファイターズのＯＢであるという幸運

社会へ出て、なんとかここまで組織人としてやってこられたのは、間違いなくファイターズで体得させてもらった「物事に取り組む際の基本姿勢」が、言い換えると「一流をめざす心構え」が叩き込まれていたからだと思います。社会人となる前に学生が真剣に取り組む対象は、スポーツでも学問でも、芸術でもボランティア活動でも何でもいいと思いますが、スポーツ、特にフットボールはその取り組みの過程がわかりやすいのだと思います。フットボールチームの運営は、企業活動にほかなりません。高校生のリクルーティングは、企業の採用活動そのものですし、対戦相手のスカウティング（事前分析）はマーケットリサーチ（市場調査）に似ています。また、オフェンス・ディフェンスの各ポジションやスタッフが、それぞれの専門性を高め発揮しながら勝利という一つの目標の達成をめざすのも、企業の各部門が役割分担し、連携・協働しながら経営理念を実践していくのと同じ営みです。毎年日本一をめざすファイターズという組織の中で、こうした営みを日々具体的に繰り返すことのできる環境にいられた幸運に感謝しかありません。人間は誰もが弱いもので易きに流されがちですが、同じ志を持った先輩・後輩・監督・コーチやＯＢから常に気付きを与えてもらいながら、遠回りすることがあっても目標に近づいていく。一人ではとてもやり遂げられない日本一という大事業を成し遂げようとする。しかも、ファイターズは、とてもリベラルでフラットな組織です。学年に関係なく自分の思いを表現することが許されています。もちろん仲間に思いを伝えるには、自分も普段からしっかりと取り組んでいなければ相手に何も伝わらないですし、聞いてもくれません。まさに互いが切磋琢磨する組織風土の中で、甘えた考えの多かった私をいろいろな角度から鍛え直してもらう日々でした。二十歳前後の青春期に、達成感・挫折感・自信・嫉妬・覚悟・後悔・歓喜・失望等々、人生で経験するあらゆる感情を、非常に濃密かつ相当な振り幅で経験することができたファイターズは、私にとっては人生の縮図のような場でした。両親に援助してもらいながら、このような恵まれた環境で学生生活を過ごせた自分はなんて幸運なんだと心底思います。

さらに、この幸運な環境は卒業後も続くのです。例えば、メディアを通じて鳥内前監督の顔を見たり声を聞いたりする度に、自分の現役時代にご指導してもらった言葉や教えを思い出しては、自分に問い掛けていました。果たして自分はいま「真っ向勝負を楽しめ」ているだろうか？日々「えげつない」取り組みが出来ているだろうか？組織の仲間と目的を共有して「要求」し「気付かせる」ことが出来ているだろうか？と。また、毎年秋季シーズンが始まって、リスクを取りながら最後まで決して諦めないファイターズの試合運びや現役諸君の取り組み、とりわけ4年生の言動を聞いていると、自分の襟を正されると同時に謙虚な気持ちにさせられています。目の前の仕事に日々忙殺される中で、「学生があそこまでやっているのに、プロの職業人である自分がこんな取り組みでいいわけがない。このままではダメだ。」と反芻していることに気付くのです。

現役の皆さん、遠く離れたインドの地から一人のＯＢが、いや、世界中にいる多くのファイターズファンやＯＢが貴方達の一挙手一投足から勇気を貰っているのです。それを誇りにも意気にも感じて、是非とも今シーズンも自己実現を果たしてくれることを信じていますし、見届けさせていただきます。

Fight On!

Profile

長野祐一（ながの・ゆういち）／浅野中学・高校（神奈川県）で6年間フットボール部に所属し、ファイターズでは2年生までQB、3年生からトレーナーに転向。1997年セコム㈱入社。2000年より社内の海外留学制度で米国コロンビア大学社会福祉大学院修士課程へ留学。2002年セコム医療システム㈱出向後、通所介護事業所やシニアレジデンスの開発に従事。2010年セコム㈱復帰時はグループ経営企画・管理や高齢者見守りサービスの企画・開発に従事。2016年セコム医療システム㈱常務取締役に就任、2019年よりインドにある総合病院サクラ・ワールドホスピタルへ赴任中。